

氏名	金関 猛
授与した学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博乙第 4460 号
学位授与の日付	平成 28 年 3 月 25 日
学位授与の要件	博士の論文提出者 (学位規則第 5 条第 2 項該当)
学位論文題目	ウィーン大学生フロイトー精神分析の始点ー
学位論文審査委員	教授 田中 共子 准教授 大杉 洋 教授 出村 和彦 教授 三宅 新三

学位論文内容の要旨

「ウィーン大学生フロイトー精神分析の始点ー」は、序、第 1 章～第 6 章、あとがき、注、フロイトが履修した講義のリスト、参考文献、主な人物の関係図、そして、3 つのコラムからなり、全体で 287 頁である。本書はフロイトがウィーン大学に在学していた 7 年半に焦点を当て、その間の生理学、動物学の研究、哲学との出会い、様々な師や友人との交流に精神分析の始点を見いだそうとするものである。

序では、ギムナジウム生であったフロイトが医学部を選んだ理由、また、当時の医学研究の潮流について述べた。フロイトは、医者になるために医学部を選んだのではなく、あくまで自然科学者を志していた。フロイトがウィーン大学で過ごした 1873 年から 1881 年は、実証主義科学としての医学が確立し、そうした研究が展開され始めた時期であった。フロイトの師となったウィーン大学の教授たちはそうした厳密な実証主義者であった。

第 1 章ではフロイトがウィーン大学で受講した講義を確認した。医学の専門科目と並んで、フロイトは動物学の講義を熱心に受講していた。これはフロイトがダーウィンの進化論に大きな関心を向けていたためである。また、フランツ・ブレンターノの哲学の講義を受講していた点にも注目した。またこの章では、ウィーン大学におけるユダヤ人学生の立場についても論じた。

第 2 章では学生時代にフロイトが発表した論文「アンモシーテス（ヤツメウナギの幼生）の後根の起始について」を取り上げた。フロイトはアンモシーテスの脊髄の微細な切片を顕微鏡で観察し、末梢からの刺激を伝える感覚神経がどのように脊髄につながっているのかを明らかにしようとする。それは根気強く丹念な手仕事を持続させる研究であった。そして、この論文の背景には進化論があ

った。フロイトにとって進化論は観念としてあったのではなかった。もっとも下等な脊椎動物とされるヤツメウナギの神経系を観察することによって進化論を実証しようとしていたのである。

第3章ではフロイトが生涯にわたって敬愛していた師エルンスト・ブリュッケとその研究所について論じた。ブリュッケはヘルムホルツ学派の一人に数えられる生理学者であり、学界の権威であった。ブリュッケはそれ以前の生氣論を退け、生命体には物理、化学的な力しか作用していないという立場に立つ。フロイトはブリュッケ教授からそうした生理学の精神を徹底的にたたき込まれていた。ブリュッケの講義録には、精神分析の根本につながる見解を見いだすことができる。また、生理学研究所におけるブリュッケの後継者エクスナーの考察は、ヨーゼフ・ブローイアーに受け継がれ、さらにフロイトへと継承される。こうした意味でも、ウィーン大学生理学研究所は精神分析の一つの始点であった。

第4章ではフロイトとブレンターノの関係について論じた。ブレンターノは現象学の祖とされる哲学者である。フロイトはブレンターノの講義を受講するだけではなく、学友パーネトとともに私宅に招かれ、親しく言葉を交わしていた。フロイトはブレンターノについて友人ジルバーシュタイン宛の手紙で多くを語っており、この章ではその書簡を手がかりにフロイトと哲学の関わりについて考察した。フロイトはブレンターノの論理の明晰性、自然科学を重視する立場に深い感銘を受ける。また、フロイトは学生時代にブレンターノの推薦もあって、当時、編纂されていたドイツ語版J・S・ミル全集の翻訳にも携わった。こうした哲学的な知見は後年の精神分析の展開の基盤となる。しかし、その反面、ブレンターノの有神論には違和感を感じ、ミルの合理主義的な楽観性には同意できなかった。学生時代のフロイトは哲学に惹かれつつも、一定の距離を保っていた。

第5章では、フロイトとニーチェの関係について論じた。学友パーネトは学生時代ニーチェに関心を寄せ、フロイトも加入していたウィーン大学の読書協会でもニーチェについて論じていた。それはまだ一般にはニーチェが知られていなかった時代のことである。フロイトはパーネトを通じてすでに学生時代にニーチェのことを知っていた。そして、大学卒業後ではあるが、パーネトはニースで実際にニーチェと知り合い、そのときの模様をフロイトに書き送る。その手紙は残されていないが、パーネトは婚約者宛の手紙でもニーチェのことを書き送っている。この章では、その手紙に基づいて、ニーチェ、パーネト、フロイトの関わりについて論じた。

第6章はまとめの章である。フロイトは合理性、論理性という基盤をブレンターノやミルと共有していた。しかし、フロイトはミルについて「不条理への感覚」が欠如すると書く(婚約者宛の手紙)。それは、フロイトのブレンターノに対する思いでもあっただろう。それに対し、フロイトは人間の心の不条理に関する洞察をニーチェと共有する。しかし、ニーチェがそうした洞察に基づいてある種の「神学」(精神分析協会でのフロイトの発言)を構想し、人類の救済を志向したのに対し、フロイトは、心の不条理をあくまで合理的に解明しようとする自然科学者の姿勢を貫いた。精神分析はそうした自然科学者の精神から生み出されたのであり、その始点はウィーン大学生フロイトの内で形成されたのである。

学位論文審査結果の要旨

金関猛氏提出の「ウィーン大学生フロイトー精神分析の始点ー」に対する学位論文の審査と学力確認は、2月17日（水）10時30分から12時30分にわたって、文学部会議室にて行われた。

始めに金関氏から、A4版1枚の配付資料をもとに、学位論文で主張しようとしたことからの意図や研究の特徴、主要な主張に関する説明が行われた。次に審査委員会の委員からの質問とそれに対する応答が行われた。その後、提出者が著したドイツ語の論文を資料として、ドイツ語の堪能な教員との応答があり、高い外国語力を確認して、学力確認の手続きを満了した。

提出者による説明の要点は、以下の通りである。フロイトはドイツ語圏の研究者で、ドイツ語による著作や書簡を残している。だが日本では、アメリカを経由した英語文献やフランスを経由したフランス語文献に基づくフロイト研究が中心をなし、ドイツ語資料によるフロイト研究はいまだに不十分である。そのため精神分析の理解にも精密さを欠く面が生じている。例えば、「抑圧」と訳されてきた専門用語は英語(repress)を介した術語であり、ドイツ語の *verdrängen* にある「排斥」や「追い出し」といったニュアンスを十分に伝えていない。そこで本論文では原典を読み解く本格的な研究を志した。フロイトの精神分析の始まりは一般に 1895 年以降とされていることから、それ以前の著作を使った研究はそもそも少ない。しかし本論文では、思想の根幹を探るためにウィーン大学生時代のフロイトの活動に焦点をあてた。フロイトは、初期に科学者としてのトレーニングを受けて実証主義の発想を身につけ、そのうえで無意識を科学するという未踏の挑戦を行い、実証主義を相対化して乗り越えていった研究者であると解釈できる。学生時代のヤツメウナギの神経系の研究はことに示唆的で、ダーウィンの進化論を観念論で終わらせることなく、解剖学的手法を通じて実証しようとした試みとしての意味を持つ。師弟関係や交友の指摘は従来からあるが、ブリュッケ、エクスマー、ブローイアーそしてフロイトという流れが、科学史的な系譜として読み解けることを、もっぱら一次資料を使って証明した。哲学との接点も重要な観点であり、とりわけニーチェとの比較については自然科学への立場の相違を立脚点として、考察している。特に青年フロイトが親友パーネトを介してニーチェの人と思想に触れた経緯について論じているが、これは日本の文献では初めてのことである。

続いて行われた審査委員の総評の要点は、以下の通りである。文章が明晰でわかりやすい。ドイツに調査に赴いてドイツ語の資料にあたり、新旧のドイツ語の文献を縦横に駆使している。医学的な観点から精神分析を論じる立場とは趣を異にしており、独文学者ならではの成果をあげたフロイト研究といえる。従来日本では類のない詳細な読み解きが行われた結果、一般に見逃されてきた点が指摘されて誤解を正すことにもなっており、学術的な価値は高い。科学技術の未発達な時期にもかかわらず、自然科学者の立場から心をあくまでも合理的に解明しようとした、という指摘は頷けるものであり、学生時代のフロイトの動物学的な研究の視点が後年の心のシステム解読の背景にあることが説得的に実証されている。本論文によって、結果的な現象を観てメカニズムを推測する科学の営みが、当時の知識と学問観の中で展開された時のインパクトが理解できる。

なお本論文には、校正の点から修正してほしい点はいくつかあるとして、改行のミス、コラム挿入場所の再考、行あけ基準の統一などが指摘された。

質疑で取り上げられた主な観点は、以下のようなものである。確認のための質問としては、引用文献の詳細、臨死体験の影響、山歩きを趣味としたという記述の根拠、自然は観察と実証が大事だという文章の意味、自然からの疎外と人間に関する記述の含意などである。フロイトの思想を巡っては、思想史における位置づけ、人文学との関係、古典との関わり、不条理の捉え方に関する解釈などが議論された。資料の活用と解説に関しては、大学で受けた教育の影響力の程度、後続研究者と比べた場合の初期体験の独自性、書簡の資料的な価値に関して、提出者の見解が尋ねられた。そして研究の立ち位置を明らかにして成果の意義を見極める観点からは、先行研究との対比において独特な点、海外文献の流れからみた視点の新しさと発見についての問いがあった。これらに関して、真摯に見解が述べられていき、極めて充実した議論が行われた。

提出者はさらに続く研究の構想について語り、今回の主題は一層の展開が期待できることが示された。ドイツ語の資料を丹念にあたって、知の巨人とされるフロイトの研究思想の形成を、その初期的学修を起点に読み解こうとした本論文は、高い学術的な意義を備えている。審査委員会は、全員一致で本論文を博士の学位に値するものと認めた。